日曜附録

女の群

水野葉舟

新宿の終点で電車を降りると、湿気を含んだ、生暖かい空気が、柔かく顔を包んだ。すると、殆んど何の力も加へられないで、すぐ、住み馴れた郊外の道が、心に思ひ浮べられる。

此頃は、電車が忙しいので、この終点で電車を降りるのは、少お在お更けて、街が眠つて居る。一日市街の中で働いて、在が更けて、静まつた端に来て、吐き出されたやうに、寝電車を降りて立つたのには、自分はすぐ更らに暗い郊外の道を思ひ浮べて、疲れた、さびしい心持が起るのである。

で、

「さ、もう一息だ」と、自分で自分の身体に力をつけるやうにして、その暗い、狭い町の方に歩いて行く。

今夜は稍く冴った雲の中に、十二三日の月のある晩である。何事とよく空に鈍い、半透明の光がある。水蒸気を含んだ空気は、その光を反射して、霧の下りて居るやうに、陰影は微明で周の高の凡てのものを照らして居る。自分はその中をおいて行く。

空が広い。その雲った銀の光が、無数の雪をして、低い西側の家の屋根の上を覆って居る。家は黒く乾いた色をして、その微明の中に沈んで居る。この家の中間から、広い室を見る時と、自分は一種の戦慄を感じた。この冷った銀の光を、自分の神経を軽く麻痺させて行くやうに、自分の過去を凡て忘れてしまった。今迄の悲しい、黄色い焼の色も、疲れた心持も凡て忘れ、中のてし電まり。自微かな電気の力が、全身に感じて居るやうな興奮と、眠りは深はれて行くやうな麻痺とが自然に伝って来る。

寂しい、重い、陰鬱な中の美しさ！、自分

は、自分の生きて居る事をも意識しないやう

方に歩いて行く。

は、自分の生きて居る事をも意識しまいやうまに相で歩いて行く……

丁度、若葉が伸びる頃だ。斯う言へば、この陰鬱い、電氣力の充ちた空のたゞ、地上の右ゆるものは皆伸びて居るだらうと思はれる。自分は、自然界の凡てのものが、毛意識で生きて居るやうに、嗅覚に毛意識によって、自分の歩きつけた道を歩いて行くのであった――同を閉つて居ても、自然に曲る所は曲ると言へ程、歩き慣れた道である。

右手は広い屋根の板塀が続いて居た。そこの角を曲ると、たに、斜に外れて別れた道へ入った……と思へと、とやく〳〵と言へ人声が耳に入って来た。自分は暗い霧を障てて物の音を聞くやうに感じまおら、音をすかすやうにして見た。すると明かに下駄の音が聞え、一群の人の背が見えた。自分はふっと音に返ったやうに、足を早めた。

陰鬱園の中に、影のやうな人の背がだん〳〵

寂しい、重い、陰鬱な中の美しさ！、自分

落葉園の中に、影のやうな人の背がだんだん近づいて来た。黒い幾人ものから聞える言葉が、入り交って耳に入って来る。出自分はおつとその人達に近づいて行った。

女の群んであった。自分の歩調がおいとその群の後に近づいて、人の女が、二三人づつ話して十二三が行くに分れて、すぐその後に近ひついた。牛の群んが歩いて居るやうな、重い歩きぶりと、一匹か、艶かしい黒かみ心おをとり立てる飾りの色が目無いのが、すぐ目には、たのと思った。車調子の空中、見えた。自分は又、ふと自分と全く違ふ人の群の傍に居る、不快な感つまらぬさを感じた。急いで、この群を歩きかうとした。前後に歩いて居る人を追ひ越しながら歩いて居る三四人を追ひ越したと思ふと、すぐうはこと、上者の耳を打つやうに聞えた。自中者の分はで他ものを言ふの急いで、その人達をも追ひ越した。

同じ列に並んで、一歩先きに出ると、その

同じ列に並んで、一歩先きに出ると、その言葉がよりとはっきり耳に入った。

「私は実に……神の恵みだと感じました。」

と、そのはにいの音を含んだ声で、左理に猫子を強めた言葉が耳に入った。

「ハア、々々……」

そのに並んで居る女が、力を入れて、強を受けた。自分は極同じ様に

ゆるりもせずに田はお日を囲って、三歩、その人を歩きぬいた。

三

心には、暗い陰でぼんやりした、肥った顔を

した女が、明るに田び出された……この人達はこんから、この道を歩いて、日或るこツシヨナリーの寄宿舎へ帰って行くのだ。

自分はやっと、その女の群の中を歩きぬけてしまと、ほッとしてと又疲れた心おもした。

酸

盲人の群に取り囲まれて、その中を

を、やっとの田ひに出て来たやうな心おがした。盲人の群！、盲人の群！……

灰色に感じさせるやうな……自分はさう言

急いで、その人達を追ひ越した。

灰色に感じさせるやうな……自分はさう言
ふ心おかしした。

女の群は、郊外のぬいと端の一廊の中に帰
このつて行くのだ。明るい、華麗な会堂
人煙の中で、空を感情に興奮しまがつた心
おをその俺を抱いて来て、その家の家の中
に帰つて行く。

自分は冷のら歩いて来る。この孤明
の中を歩いて来る。
女の群は田心の中に映ぬ
きまぬ
と、その帰つて行く家とを
らその先きを歩いて行く。

の中を歩いて来る
見附きまを歩
らその先きを歩いて行く。

一

（と、その帰って行く家とを
君江田への中に映ず

水野業舟原稿女の群

本間文庫
文庫 14
A148